

ぐるっと首都圏

卒業生 それぞれの思い出

2カ月にわたって連載した「母校をたずねる」神奈川県立小田原高校編。紙面と毎日新聞ニュースサイトで募集した「私の思い出」に、多くの卒業生の方から

ご投稿をいただきました。*小田高編。最終回の今回、その一部をご紹介します。

【首都圏版編集長・西尾英之】



神奈川県立小田原高校 ⑧

勤勞奉仕で授業なく

歯科医師、高坂昌雄さん(86)＝東京都武蔵野市、1946年度旧制中修了＝
旧制小田原中に入ったのは大東亜戦争勃発の直後で、まだ平穏だった。先輩たちが先生をあだ名で呼び合っていたので、ある日、教員室のドアを開けて「一年一組高坂、熊に呼ばれて入ります」と叫び、敬礼したまま硬直した。大勢の視線を浴びた。

2年生になると勤勞奉仕で授業は少なくなり、

3年生になると毎日、郊外の車道に通りぬける。燃料タンクの取付を学校で生徒と組んで、シユラルミンのリベットを穴に入れて張り合わせる作業で、女生徒は裏側で

無職、岩瀬重信さん(83)＝東京都板橋区、1951年度卒＝
正面玄関の横から階段を下りたところが小坂グラウンド(後に競輪場)だ。戦後2年くらいして、世の中が少し落ち着いてくると草競馬場となり、

禁止の通告はなかった。行ってみると、十数頭の馬が土を蹴り上げて通り過ぎる。小学校の同級生が騎手となり登場したのには驚いた。格好のよい馬を応援したが、着た。なるほど、賭け事はやめたほうがよいと悟った。生涯キャンブルに一切手を出さぬ人生は、この時の校外授業の結果である。

人生を変えた出会い

公立中学音楽科教員、齋藤隆夫さん(58)＝神奈川県南足柄市、1976年度卒＝
入学後は担任の先生の影響で生物部に入部しましたが、どうしてもトラベットが吹きたくて1年の途中から吹奏楽部に転部しました。2年の時に音楽の教師として赴任してきた小林敏先生が、当時の全日本吹奏楽コンクールの課題曲作曲者とは知らず、軽い気持ちでお話をしに行ったときに、そのことが分かりびっくり仰天。

新聞部の活動に夢中

「南足柄寺子屋塾」代表、石川寿一さん(75)＝川崎市高津区、1959年度卒＝
百段坂を上り下りした3年間で足腰が鍛えられ、体力が付きましました。今もその恩恵に浴していると思っています。ともかく夢中で活動したのが新聞部の部活でした。3年生の9月頃までやりました。新聞部長として最後の仕事は、一面を使う特集記事です。転機を迎えた米ソとタイトルを決め、資料に当たり、集中的に学んだのを覚えています。

高校教員、小澤文洋さん(51)＝東京都小金井市、1983年度卒＝
昼休みになると太鼓が響き始める。それは、応援団の練習の開始を意味する呼び鈴でもあった。従って、応援団の仲間のほとんどは卓井が常だった。2年生の時に応援団長をしていた私にとって、在学中、1回戦惜敗

応援団の意味を実感

続きだった夏の高校野球の応援のためのこの練習に、とれたけの意味を感じていたことだろうか。

同級生が50歳になる一昨年、大同窓会が箱根湯本で開かれた。その際に、当時の応援団長として校歌とエールを指弾して感じたことがあった。

同じところを何度か聞きた。笑い声とともに段々声も大きくなり、全体を通して歌えるようになった。図書館の中から「誰だ！」と怒られて、静まり返った図書館の中にすすこと入った記憶があります。団魂世代の始まりで、受験した私大理工系の競争率は軒並み20倍超えの時代でしたが、今思えば楽しかった懐かしい青春です。



現在の小田原高校の校舎

懐かしい青春時代

無職、片野孝治さん(70)＝東京都町田市、1964年度卒＝
前田東京五輪の前年、

1963年の時は高校2年で、昼休みは剣道場での卓球か図書館での自習や読書でした。我々5、6人の仲間は読書に飽きて、図書館の前の芝生に寝転がり、誰かが書き留めた、当時ラジオから流れていたデューク・エイセスの「おさななしみ」の歌詞のメモを見ながら、皆でハモっていました。

次回から私立聖心女子学院編

「母校をたずねる」小田原高校編は今回で終了し、次回2月3日から、私立聖心女子学院(東京都港区)編を連載します。